

大分先端画像診断センターが導入した新しいPET/CT。「地域共同利用を進めたい」と話す友成健一朗センター長



大分先端画像診断センター

PET/CTは、特殊な影装置と、がんの形や大薬剤を注射してがんの活動きさ、臓器のどの部分に病変があるのかなどの画像を得られるPET(陽電子放射断層撮得られるCT(コンピュータ断層撮影装置)の機能が一体となった装置。両方ターは10年度、保険適用での画像を融合させることで、より明確な診断ができる。同センターは2004年に県内で初めて導入した。新しい装置は、従来の装置より解像度が高く、撮影時間も約20分に短縮する。CTも4スライスから40スライスとより薄い画像を得ることができるようになった。大分大学病院が導入したい」と話している。

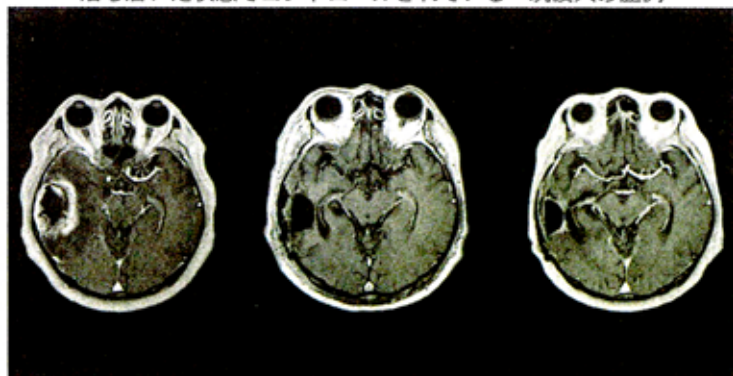
がんを早期発見するための最先端の医療検査機器「PET/CT」を県内の民間医療機関で唯一、導入している別府市上八ヶ浜町の「大分先端画像診断センター」は、より高精度な画像診断ができるPET/CTを新たに導入し、9月から運用を始めた。

今月から運用 PET/CT

より高精度な画像

がん

脳腫瘍のワクチン治療 早期発見へ最新鋭機器



①術前の画像。白い円形が腫瘍本体。周りに腫瘍が散らばっていると考えられる②術後の画像。腫瘍本体をくり抜いて取ることができた③放射線+抗がん剤+ワクチン療法を施行して18カ月の無再発の画像。腫瘍は増大が見られず、落ち着いた状態でコントロールされている=筑波大の症例

大分大脳神経外科

手術後自家組織を加工 西日本で初の治験

を作製する。ワクチンを その結果では1年生存率50%、2年生存率20% 抗がん剤で治療している投与(皮下注射)する 率50%、2年生存率20% 抗がん剤で治療していると、ワクチンは体の免疫とされる膠芽腫に対し少細胞を活性化させ、がんしずつ良い成績が得られ細胞中の特殊な目印を てきており、うまくいっり免疫細胞は、がん細

大分大学病院脳神経外科が10月から「脳腫瘍の自家がんワクチン治療」の治験を開始する。より高い治療効果が期待される。

胞だけを攻撃するよう 手術で腫瘍を摘出、放 大分大が加わった。10月

悪性脳腫瘍の中でも最 射線治療、抗がん剤(テ 悪とされる膠芽腫の初発 モタール) 投与を行い、 患者を対象とする治療 それにワクチンを組み合 担当の脳神経外科、阿 で、手術で取り出した わせるといった治療方法 部電也准教授は「膠芽腫 病理診断用のホルマリ ンで、筑波大、東京女子 は正常な脳に染み渡るよ 潰けのがん組織を加工し 医大が治験を行ってき くに広がっていく。腫瘍 を取っただけではコン

たPET/CTと同じ能力。PET/CTによるがん検査は全額自己負担(12万円程度)となるが、10年から早期のがんを除くすべての悪性腫瘍のPET/CT検査に健康保険が適用さ